



子どもを伸ばすコーチング術

お父さん、お母さんのための子育て術

著者 田中正徳

ショウイン式学習法開発者
31年間の学習塾指導歴
株式会社ショウイン代表取締役

第一章 子どもを伸ばすコーチング

●子どもはなぜ勉強しないのか？

親が「勉強しなさい」という。

子どもが、「わかっているよ」「うるさいなあ」「今やろうと思ってたのに」と答える……。



私たち親の世代が子どもだった時代から、親子のこうしたやりとりは、まったくかわっていないように思います。もちろん、現在のように高等教育への進学率が高くはなかった戦中、戦前には、家庭ごとに事情は違ったでしょう。子どもに期待される「仕事」が勉強だけというのは、むしろ幸せな状況と言えるかもしれません。

ところで、そもそも子どもはなぜ勉強しないのでしょうか？

理由はいろいろ考えられますが、一番の原因は「勉強に何の意味があるかわからない」ということかもしれません。たとえば、算数や数学では「日常生活には足し算、引き算、かけ算、わり算で十分なのに、どうして方程式だの微積分だのと、ややこしい勉強をしなければならないのか？」と疑問をぶつけてくる子どもたちは、数多くいます。

それに対して「理屈ばかり言ってないで、やるべきことなんだからやりなさい！」と押し切るのも、1つのやり方ではあります。しかし、相手に納得してもらったほうが、効率良くことが進むのは大人同士の関係でも、子どもと大人の関係でも変わりません。だとしたら私たちは、やみくもに「勉強しろ」と言うのではなく、子どもの疑問に納得のいく回答を与える必要があるのではないのでしょうか？

とは言うものの、これは決して簡単に答えられる問題ではありません。以前は通用したかもしれない「良い成績を取れば、良い学校に進学できる。良い学校に進学できれば、良い会社に就職できて、良い生活を送れるようになる」という答え方は、終身雇用が崩壊しつつある昨今では説得力を持ちません。一流大学を優秀な成績で卒業し、一流企業に就職できても、それで一生ご安泰という時代ではないのですから。

むしろ実力があれば学歴とは関係なく、起業家として成功する鈴が増えていることを、ある程度の年齢の子どもたちは知っています。「良い学校に行くために勉強するのだ」はまったく回答になっていないことを、私たちは肝に銘じておくべきでしょう。

子どもたちは「親は勉強しろと言うのが口癖の存在」くらいに考えていますから、勉強することの意味を答えてもらおうとは期待していないかもしれません。ですが、私たちが説得力ある回答をあたえられないのであれば、「勉強しろ」という言葉はただ空回りするだけですし、時には親に対する信頼を失わせる原因にもなりかねません。

本書では、こどもにどのように勉強させたら最も効率的かという「How」を中心に扱いますが、根底にあるのは「どうして勉強するのか」「させるのか」という「Why」です。この質問に、計算式のような「正解」はありませんが、長年、子どもたちの教育に携わってきた立場から得た、私たちがなりの回答を順を追って明らかにしていきたいと思えます。

読者のみなさんもここでいったん立ち止まって、「なぜ子どもは勉強しなければならないのか？」と問いかけてみてください。

●大人はなぜダイエットできないのか？



大人になって振り返ってみると、やるべきことが勉強だけで良かった子ども時代は、何と楽しかったことか、と思うのではないのでしょうか。

社会に出ると、個人の努力だけではどうにもならないことが、多々あります。

でも勉強は違います。一人でできますし、やればやっただけ成果があがるのです。それも、テストの点などに速効で結果が反映されてわかりやすい。そして自分の身についたことは、

自分自身だけの成果であり、誰もそれを盗み出すことはできません。

高校くらいまでは、誰でも理解できる程度のことしか勉強の対象になっておらず、誰だって、ある程度の結果を出すことができる。すでにその時代を通り過ぎた私たち大人は、それを良く知っています。だからこそ、「こんな程度のことかなぜできない」「大した労力はひつようないのに、どうしてやらない」と、子どもたちに対して歯がゆくかんじるのでしょうか。

しかし考えてみてください。

大人には義務教育はありませんが、やはり相変わらず「わかっている」のにできないことは、たくさんあるのではないのでしょうか？

日本ではたいていの女性が、（たとえスマートでも）「自分は太っている」と感じているそうですから、ダイエットをしようとして、挫折した経験は、ほとんど誰もがもちでしょう。

男性だったら、ダイエットという意識はあまり無いかもしれませんが、たとえば「コレステロール値が高いから、脂っこいものは食べないようにすべきだ」とわかっているのに、ついつい夜中に高カロリーのもの食べてしまう、といることがあるはずで。

禁煙しようとしても果たせない。今年こそ英会話の一つでもモノにしてやろう、と思い続けて早10年。などなど、要するに私たちはいくつ

になっても、親から「勉強しろ」と言われていた時代と、大して変わってはいないのです。

人にいくら言われても、私たちは動きません。動けない、と言った方が正確かもしれません。相手が気遣ってくれているのがわかっている、「ちょっと痩せた方がいいんじゃない」と言われればムカッとす。「そんなことわかっている」と言い返したくもなるでしょう。もちろん医師から、「このままの食生活を続けていたら、5年後には命が危ない」と言われれば、ビックリしてアドバイスに従うかもしれませんが、それ以外のケースでは、外からの働きかけで私たちが動くことは、ほぼ確実に無いのです。

親が「勉強しろ」と言っても、子どもたちが動かない、動けないことに、何の不思議もありません。

では「わかっている」のにできない、「今やろうと思っていた」のにできないという状況は、どのようにしたら打破できるのでしょうか。いろいろな方法論があるでしょうが、最も効率がよいのは、「ロールモデルを見つける」ということかもしれません。

ロールモデルとはすなわち、お手本にすべき人、お手本にしたいと思うような魅力的な人のことです。「あの人のようにエレガントな立ち居振る舞いができるようになりたい」、あるいは「あの人のようにテキパキと仕事ができるような、時間管理能力を身につけたい」など、「すごいなあ」と思う相手がいると、人は自然とその人を見習い、まねしようとするものです。

「見返してやる」という、劣等感や怒りから来る思いも、前進のための良い原動力となりますが、できればポジティブな感情をベースにした方が効果的です。そして憧れが強ければ強いほど、目標に向かっての前進は効率よく進みます。

●ロールモデル（お手本）不在という問題



子どもたちで言うなら、スポーツ選手や芸能人などがわかりやすいロールモデルでしょう。

たとえば、イチロー選手や松井秀喜選手のメジャーリーグでの活躍を見て「格好いい！」と思う。そして、あこがれの心から、自分もああなりたいと願うようになる。この場合、子どもたちは親があれこれ言わなくても、自発的に目標に向かって行動するようになります。

しかし勉強では、この自然発生的なロールモデル設定は、ほとんど機能しません。理由は二つあります。

まず、第一に勉強は、スポーツや芸能のように「一目瞭然」ではありませんからです。メジャーリーグで活躍する、世界を舞台に女優として、あるいは歌手として活躍する、などというケースは、目に見える形で子どもたちを魅了します。

しかし、「勉強」はどうでしょうか。昔は偉人伝を読んで感動し、たとえば医学の道を目指すなどのパターンが機能しましたが、情報量の多い現代社会では、それは難しいでしょう。スポーツ選手などの活躍が連日報道される一方で、頭が切れる人のスマートさや、格好よさは、ほとんどがビジネスの現場など、大人の世界でしかあらわになりません。当然、子どもたちがそれを目撃する機会は、スポーツや芸能などと比べて、極端に少ないのです。

第二の難しさは、「勉強」は自分で選択したものではないということです。野球に興味のある子どもだからこそ、イチロー選手や松井秀喜選手に惹かれます。サッカー好きな子どもなら、中田英寿選手や中村俊輔選手に憧れるでしょう。ロールモデルの設定自体に、子どもの趣味嗜好がダイレクトに反映されるのです。

しかし勉強ではそうはいきません。勉強することが大好きという子どもを除いて勉強は、たいていの場合、自分で選択したものではなく、与えられたもの、やらなくてはならないものでしかありません。

何かを学習する時、ロールモデルの設定は非常に効果的な方法ですが、子どもの勉強ではこの道はほぼ閉ざされていると言っても過言ではありません。ロールモデルという最初のきっかけさえ見つければ、あとは放っておいても自発的に目標に向かって進んでいく、ということは、勉強ではあり得ないと考えた方が良いでしょう。

●イチロー選手を成功させた父のコーチング

目標へ向かう原動力として、感情が利用できないとしたら、残るのは理性に訴える方法です。それはつまり、なぜやらなくてはならないかを、子どもたち自身に理論的に納得させることです。

この方法が上手くいくであろうことは、私たち自身のことを考えても、わかるのではないのでしょうか。前述したように、他人からいくら言われても、私たちはなかなか動かないし、動けません。だとしたら、自分が納得して一歩踏み出すしかない。また他方で、私たちはそれが「やらねばならない」ことだと、十分に理解しています。私たちは、すでにそれを知っているのです。回答は私たちの中にあるのですから、それを引き出して納得させることこそが、最良の手段となります。

子どもたちは、なぜしなければならないのか、勉強の意義が何なのかはわからなくても、とりあえず、勉強しなければならないこと、しなければ「やばい」ことを、知っています。自分たちの中にあるそういう思いを、まず親が引き出してあげる。「勉強しろ」と押しつけるのではなく、「宿題をしないで放っておくと、気分が悪いんじゃない？それはなぜだと思う？」と、子ども自身に考えさせることが、子どもたちを勉強へと導く良い方法ではないのでしょうか。

こうした手法は、実はいま巷でも評判の「コーチング」と呼ばれるメソッドの一種でもあります。コーチングは当初、スポーツの世界で注目

されました。選手の力を十二分に引き出すには、コーチとして様々なスキルが必要であることから、研究が進みました。もちろん最大限の効果をあげたいのは、スポーツの分野ばかりではありません。そのため、ご承知の通り、現在では、ビジネス分野でのコーチングも、非常に注目をあつめています。日産自動車のカルロス・ゴーン社長が、職場にコーチング術を導入することで、画期的な業績回復を達成した話などがよく知られていますね。

スポーツ界の名コーチの中でも、子育てに関連してよく引き合いに出されるのは、我が子の能力を最大限に引き出した鈴木宜之氏。イチローこと、かのイチロー選手の父上です。メジャーリーグの年間最多安打記録を塗り替えるなど、超人的な活躍を続けるイチロー選手の現在は、幼い頃からの宜之氏の指導あってこそ築かれた、と言っても決して言い過ぎではありません。

もちろんイチロー選手に、天性のセンス、運動能力が備わっていたことが大前提ですが、常に息子の将来を考え、野球の理論書をひもとき、毎日欠かさず野球の練習につきあった父の努力こそが、息子の持つ才能を引き出し、開花させたのです。宜之氏は、子育ては父親最大の仕事である、とおっしゃっています。親の信念と努力で、子どもは確実に伸びるということの良いお手本、それこそロールモデルとして、見習いたいものです。

●誰でもできる！しつけとしてのコーチング

しかし、ここで疑問が湧いてきます。

スポーツはもとより、ビジネスでも活用されているコーチングが、人間の能力を引き出す良い方法であることは確かだろう。しかし、良いコーチングを行うには、それなりの知識やスキルが必要なのではないだろうか、と。

心配は無用です。

私たちは、何もバッティングのコーチをするわけではありません。対象は私たちも通り抜けてきた、学校教育における学習なのです。かつて「勉強」で失敗したことのある人なら、そして現在、ダイエットができない、続かない、禁煙、節酒できないなど、何らかの問題を抱えている人なら、コーチングは誰にでもできます。

むしろ、誰もがほとんど予備知識なしに行えるのが、我が子の学習に関するコーチングである、とさえ言えるかもしれません。

ものごとの善悪を教える、人間としての礼節を教えるなどと同じように今すべきことをキチンとこなすという生活態度を、「勉強」を通じて教えるという意味では、学習のコーチングは「しつけ」でもあります。子どもを愛し、持てる能力を最大限に活かせる人間に育てて欲しいと、心から望んでいる親ほど、我が子にとっての最適なコーチなのではないでしょうか？

次章からは、コーチングの方法、子どもの勉強をサポートするために、親が押さえておきたいポイントなどを、具体的にご紹介していきますが、**「教えることは学ぶことでもある」**と心にとめておいてください。子どものサポートをすることによって、かつての自分の失敗が、癒されるように感じることもあるでしょう。何かをやろうとして、最初の一步を踏み出せずにいる、現在の自分自身を鍛えることにつながるかもしれません。

子どもに勉強させる、学校の成績を上げる、と言った、主要な目標とは関係ありませんが、コーチングの副産物として、お父さん・お母さん自身の成長も視野に入れておきたいものです。

第二章 吉田松陰に学ぶ名コーチの極意

●松下村塾の学習スタイルを現代に活かす



カリキュラムや指導法などを、どれだけ綿密に準備しようとも、理想の教育を実現するには十分ではない……。この事実に突き当たった私たちは、子どもとのコミュニケーションのあり方を考え始めました。

「教える内容、すなわち伝達すべき内容を、もっと確実に、効果的に子どもたちに伝えていく、も

っとよいほうほうがあるのではないだろうか」と考えるようになったのです。

そのようにして様々に模索する中、「この人こそ新時代の教育のロールモデルとなるのでは」と行き当たったのが、幕末に生きた長州藩士で、松下村塾の主宰者として有名な吉田松陰です。彼のもとからは、明治維新の原動力となった高杉晋作、明治政府で総理大臣を務めた伊藤博文、山県有朋など、そうそうたるメンバーが巣立っていきました。しかも安政6年に獄死した時、彼はまだ数えで30。高杉、伊藤、山県らとは10歳程度しか変わらない青年だったのです。

いかに、当時の俊才がずば抜けた能力を持っていたにしても、また、「人間僅か50年」と言われるほど平均寿命が短く、今よりも人間の成熟が早い時代だったにしても、同年代の青年たちを教え、導き、ひとかどの人士に育て上げた松陰という人の手腕は、驚くべきものです。

しかも、彼が師として実際に教え導いたのは、その死の早さからもわかるように、ごく短い期間でした。いったい彼は、門下生たちにどのような教育を施したのでしょうか？

松下村塾は、木造平屋建ての小さな塾でした。建物は師弟が協力して建てた、質素なものです。小屋と言っても良いかもしれません。そのような小さな私塾でしたが、松陰の名を慕って、大勢の若者たちが入門を請いにやって来ました。その際、彼は必ずこう問いかけたそうです。「あなたは何のために学問をするのか？ そして、何をなそうとするのか？

これが松下村塾の入塾試験でした。何のために勉強するのか。そして学んだことを、どのように活かし、これからの人生をどのように生きていくのか、それを自分で考えさせる。そう、先にご紹介した通り、これは現代で言うところのコーチング術です。

松陰は「入塾試験」にのみ、コーチングの技法を用いた訳ではありません。弟子たちには常々、「自分で考える」ということを、徹底して指導しました。勉強をする上で一番学ぶべきことは、人間として大切なことは何か、そして人間はどのようにして生きていくべきかを自分で自覚することであると説き続けました。

約260年も続いていた江戸幕府が、今まさに倒れようとする動乱の時代です。入り乱れる情報を吟味し、自分で考え、判断し、行動しなければ、自分のもとより、盟友たちの命をも危険にさらし、理想とする明日を築く道が閉ざされてしまうかもしれない、そんな時代です。

「自分で考える」——そういう指導法は、時代が要請したものだったのかもしれませんが、いずれにせよ吉田松陰は、コーチングの天才だったと言って間違いのないでしょう。

では松陰は、「自分で考える力を身につけさせる」という教育理念を、どのような指導法で実現させていったのでしょうか？

「学は人たる所以を学ぶなり」

(がくは ひとたる ゆえんを まなぶなり)



松下村塾 吉田松陰(1830-1859)

●松下村塾の驚異のカリキュラム

松下村塾では、統一的なカリキュラムは用意されていませんでした。各人が学力と好みに合わせて、勉強分野と教科書を選ぶのです。学習方法は講釈、討論、看書をはじめ、テーマ別にグループに分かれて行う会読、松陰自身が個人教授をする対読、課題を与えて、出てきた答えを批評する対策、思い思いに読書をして皆の前で所感を述べ、塾生の批評を受ける私業などがありました。

松下村塾での学習法は、準備されたカリキュラムを、決められた時間内に消化していくといった画一的なものでなく、いわば「ライブ」で進行する、臨機応変なものだったと言えるかもしれません。それゆえに、塾生一人一人の個性に合わせた、きめこまかい学習支援が可能になったのです。

また松陰は、塾生が個々に持っている才能を自ら発見し、刺激し、展開させ、実戦にまでかりたてるような、主体的な自己教育を重視しました。自主性を重んじるため、授業は勉強したい塾生がやってくると始められます。ですから時間割は学習者の意思、もしくは都合次第です。一日に数回やってくる塾生もいました。他塾と掛け持ちで通ってくる者もいました。あるいは、勉強に集中すると昼夜を忘れ、夜を徹して居続ける弟子もいました。

また**先入観を捨てた指導も、松下村塾の特徴**です。松陰は身分、年齢、経歴などによる先入観には一切とらわれず、各々の長所を見つけて引き出し、ヤル気を奮い立たせました。そして入門を希望するものには「授業は能わざるもの、君と共に研究せん」と答え、「眼中師弟なし、ただ朋友あり」の精神、教師と生徒という立場ではなく、**共に学ぶ同士**として、塾生と平等な立場で接しました。

松陰が**ほめ上手**だったことも見逃せません。彼は相手をほめるときには、「天下一」とか「防長随一」という言葉を使って、徹底的に讃えました。その一方で、叱るときも徹底しており、罵倒することさえあったそうです。このように硬軟を使い分けたメリハリある叱咤激励により、

本人すら気づいていない弟子たちの潜在能力を引き出していったのです。

また彼は、**競わせ上手**でもありました。塾生の競争心をあおることで、その長所を更に伸ばすよう心がけたと言われます。たとえば松陰は高杉晋作の情熱と能力を見抜くと、村塾きっての俊才・久坂玄瑞と競い合うようにしむけました。その結果、晋作はめきめきと頭角を現し、松陰に、「識見気迫他人に及ぶなく」と高く評価され、玄瑞とともに松下村塾の双壁と言われるまでに成長したのです。

翻って、現代の教育はどうでしょうか？

松陰が行なったような完全個別指導は望むべくもありません。個別的な指導なら何でも良いという訳でもありません。また、第二に挙げた自主性の重視も、学校や塾のような組織で実現するのは不可能に近い。「好きな時に来なさい」では授業は成立しませんから、「何時から何時まではこの教科」として、生徒を集合させることになります。

第三の「先入観を捨てた指導」も、言うは易く行うは難し、です。決して簡単なことではありません。そもそも、教師は生徒が「知っている当然」と考える傾向があります。たとえば、高校生なら英語の三人称単数という文法項目を、理解していて当然とみなしますが、中にはそこでつまずいたために、その他の部分の理解がままならない生徒だっているのです。

第四のほめるも、簡単なことのようにいって難しい。学校では教師の「えこひいき」ととられかねませんし、一人一人を口を極めてほめてあげる時間的な余裕もありません。また、「駆けっこも全員揃ってゴールしましょう」などという動きもあった昨今ですから、競争はむしろ、学校教育の中では排除されるべきものと見なされているフシもあります。模擬試験の結果などは別として、塾でも授業内で競争心を煽り、切磋琢磨させることは、それほど簡単ではないでしょう。

松陰の指導法を現代に活かす方法は無いのか？ 試行錯誤を繰り返しながら到達したのが、パソコンを利用した学習です。

第三章 子どもを伸ばすコーチングの秘訣七カ条

●「勉強しろ」と言わない

少年野球のコーチが発する言葉に、「ボールを良く見て振れ」という表現があります。いわんとする所はわかりますが、少なくとも野球好きな子どもが、全くボールを見ないでバットを振っているはずがありません。「良く見て振れ」と言われても、心の中で「見てるよ」とつぶやくのがオチです。

もちろん、彼らは実際のところ、ボールを良く見ていません。だからコーチもそう言うのです。しかし、本人は見ているつもりなのですから、「良く見ろ」と何度叫び続けても、状況が改善されることは、まず、ないでしょう。それよりもむしろ、「ボールがどういう回転をしているかに注意しろ」とでも言った方が良いでしょう。直接的に「ボールをよく見ろ」とは言っていないが、「ボールの回転を見ようとする」ことで、「ボールをもっと良く見る」結果に導かれる、という訳です。

さて、勉強も同じです。「勉強しろ」といくら言っても、お子さん本人は「やってるよ」と反駁するでしょう。あるいは「どういう風にすればいいんだよ」とつぶやいているかもしれません。勉強の場合、「どういう風にするのが勉強なのかかわかっていない」ことは、よくあります。多くの子どもが、「学校や塾で席に座って、先生のお話を聞くのが勉強」とおもっているようです。自宅で「勉強しろ」と言われても、何をどうするのが勉強なのか、さっぱり見当がつかなくても当然ではないでしょうか。

これは先ほどの「教える側が先入観を持っている」例の一つでもあります。私たち大人は、義務教育、その後の様々な教育をくぐり抜けてきた身ですから、「どういうふうに勉強するか」（あるいは「すれば良かったか」）を知っています。

しかし、子どもたちは知らないのです。「勉強しろ」と言う前に、勉強にとっての「ボールの回転」、つまり「どんなふうに勉強をするのか」を指摘してあげるべきなのです。

●教えようとしな



私たち旧来の塾の反省から、しみじみと実感したのは、学習には二つの要素があるということでした。

すなわち「ハート」と「スキル」です。

ハートとは勉強に対する心構えや姿勢といった、「心」に関係する部分、そしてスキルとは効果的な学習方法といった、技術的な部分です。

この両者のうち、スキルは単なる技術ですから、訓練次第で誰でも熟練者になることができる部門です。

しかしハートは難しい。なぜなら「ハート」面では、感情をコントロールする必要があるからです。

コンピュータ学習の実験教室が成功したことから、ティーチングとコーチングを分けることが、効率の良い学習指導法であると判明しましたが、その理由はと言えば、ティーチングはスキル、コーチングはハートに対するものだから。それを分離したから、上手くいったのです。技術を習得するには、ヘンに感情（ハート）が絡まない方が良い。心を導くには、教えるという行為と切り離して、コーチに徹した方が良い。そういう理由によるのです。

子どもたちの「なぜ、勉強しなくちゃならないの？」という質問は、ハートレベルの問いかけです。そして「勉強しなさい」という親の言葉は、おそらくスキルレベルでの命令です。

話が噛み合っていないことがおわかりでしょうか。そもそも親が行うべきは、しつけや人間教育といった「ハート」教育のはず。家庭でのコーチングに、やみくもに「教えよう」という気持ちを持ち込まないようにご注意ください。

なお、第一章で「なぜ子どもは勉強しなければならないのか？」と、

ご自身に問いかけてみてくださいとお願いしたのは、お父さん、お母さんが今、行おうとしているコーチングが、ハートの教育だからです。吉田松陰でしたらさしずめ、「学問する中で自分の個性に目覚め、進むべき道を見つけて行くことができる。そしてそのようにして見出した道を邁進することで、自分の人生だけでなく人の役に立つための“魂”を身につけていくのだ」と言うことでしょう。幕末とは質は違えど、現代は大きな転換を求められる激動の時代です。教育の意味をこのくらい、大きなものに考えておいても良いのではないのでしょうか。

●反省を忘れない

コーチングは、コミュニケーションの技術です。しつもんすることによって、相手から回答を引き出す。本人の中にある回答、既に知っていることに本人がまだ気づいていない回答を、質問によって引き出していく技術です。ですから、スポーツのような実技を伴うものを除いて、コーチは必ずしも、クライアントの専門分野について、深い知識を持っている必要はないと言われています。スポーツでも、メンタル面でのコーチングでは、コーチがその道の素人でも構わないのです。

ですから親御さんは安心して、我が子のコーチに就任することができるのですが、質問する際の言葉の選び方が上手な人と、そうでない人がいることは事実です。当然、次章以降でご紹介する勉強でのコーチングノウハウだけでなく、コミュニケーション技術としてのコーチングそのものを、もっと学びたいと考える方もいらっしゃると思います。その場合、コーチングの専門書（ビジネス系の入門書が良いでしょう）を読むことをお勧めしますが、それよりももっと、手っ取り早くコミュニケーションスキルをアップする方法があります。

コミュニケーションスキルを手っ取り早く高める方法・・・、それは、「ご自身との会話」です。

皆さんにもきっと、あともう一步が踏み出せない「何か」があるでしょう。規則正しい生活への一步かもしれない、禁煙への一步かもしれな

い、あるいは無駄遣いを減らすための一歩かもしれません。いずれにせよ、何の問題も抱えていない人間はいないので、自分が問題だと感じている事柄に対して、自分自身で問いかけるのです。

「どうして〇〇してしまうんだらう？」

「どうして〇〇できないんだらう？」・・・。

最初のうちは、自分の中から何の答えも返ってこないかもしれませんが。ですがやがて、何らかの回答が心をよぎります。自分と自分の会話ですから、最初にははっきりした言葉としては思い浮かばなくても、急に、遠い昔の記憶が蘇ったりするなどの形で、回答が自分を訪れるはずで

こうしたトレーニングによって得られるものは、たくさんあります。とりあえず三つ挙げるなら、まず第一に、適切な質問の技術を、自分を実験台に磨いていけるということ。第二に、質問に回答を出すもの、なかなかの大事業だと理解できること。回答が出たときにはもう、事態を改善する道のりの半分以上を進んでいるのです。ですから回答がすんなりと出てこないのは当然。お子さんへのコーチングでも、常に待つ気持ちが必要であることが、身をもって実感できるでしょう。そして第三に、自分の問題点を見つめることで、「相手と同じ目線に立つ」ことが自ずとできるようになります。私たちは皆、年齢や環境に応じた問題を抱える存在なのです。

●点数に汲々とならない

コーチングでは性急さは禁物です。

次章以降で詳しくご紹介しますが、**成績には目に見える成績と、目に見えない成績があります**。実力はあるのに、成績としては反映されない場合も、多々あるのです。コーチングを始めてもしばらくは、何ら良い結果が得られないように思える時期が続くかもしれません。しかし、それでまたもとの「勉強なさい！」モードに逆戻りしては、コーチングに着手しなかった時よりも、事態は悪化してしまうかもしれません。

「コーチングを始めたのに、子どもが結果を出さない」と苛立ちを感じる時は、こう考えてみて下さい。「私は自分が信じられないのだろうか」「私は我が子を信じられないのだろうか」と。自分のコーチングに自身がないから、大輪の花が咲く日を待てないのかもしれない。あるいは、我が子の能力を全く信じていないから、豊かな収穫が得られる日が来るとは思えないのかもしれない……。こんな自信のなさが、子育てを難しいものと感じさせているのかもしれない。

コーチングの初期は特に、目先の点数に振り回されないように気をつけたいものです。

●ペースの違いを理解する

人にはそれぞれ、その人のペースがあるということを忘れてはなりません。先ほどの登山の話に戻りますが、もし山頂まで続く階段が用意されていれば、子どもは一人でも、登山口はどこかと迷うことなく、頂上を目指していけるでしょう。誰でも無理なく登れるよう、階段の一段一段は低く設定しておきます。

さて、この階段を二人の子ども、A君とB君が登ったとします。A君は頂上まで、2時間でたどり着きました。そしてB君は同じルートに6時間かかりました。もしかいだんがなかったら、B君は頂上にたどり着く前に、登ることをやめていたかもしれません。しかし、多少時間がかか

ったにせよ、B君は自分一人の力で、頂上に立つことができたとします。

何ごともスピーディを良しとする現代社会では、A君が「頭の良い子」と呼ばれます。短時間で頂上まで行き着ける方が、確かに効率が良いのは確かです。しかし、頂上を極められたかどうか、という点では、B君もA君にひけをとってはいないのです。A君、B君の学力差はほとんどないといって良いでしょう。

では、A君とB君の違いは何か？

それは「時間の差」です。B君は普通の授業にはついていけず、いつの間にか取り残されてしまうタイプです。しかし「学力が低い」訳ではありません。頂上に立てたのですから。B君も自分のペースで階段を登っていきさえすれば、一つの単元を達成し、次へと進んでいくことができます。

既に述べたように、小中学生の間にマスターしなければならない学習内容は、特殊な事情がない限り誰にでも到達できる高さの頂上です。正しい手順で、必要な時間をかければ、誰にでも到達できるのです。

言い換えれば、小中学校の間の「学力差」など、大した意味はありません。子どもの頃、「飲み込みの悪い子」と言われた人の方が、学者として大成するだけの、ねばり強さを持っている場合も少なくありません。子どもの学習を見守る際、点数だけでなく、一つの頂上を極めるまでにかかる時間に、一喜一憂しないように心がけて下さい。



●徹底してほめる



子どものやる気を引き出すもっとも効果的な方法は「励まし、ほめること」。「親がほめ上手なら子どもは伸びる」と断言できます。「子どもをほめるのが大切なことはわかっているし、ちゃんとほめていますよ」とおっしゃる方は多いのですが、親がほめているつもりでも、子どもは「ほめられている」と受け取っていないのが実態のようです。

たとえば、テストで70点取ってきた子どもに、「えらいね、よく頑張ったね!」とほめる。次いで「今度は90点を目指して頑張ろうね!」と励ます。こんな会話をした覚えはないでしょうか?ほめ、かつ激励したつもりかもしれませんが、これでは子どもはほめられたとは思いません。むしろ70点では不十分で、90点取ってこいとお尻を叩かれたように受け取ります。

それでは、「ほめ上手、励まし上手」のお母さん、あるいはお父さんになるには、どうしたらいいのでしょうか。ポイントは二つです。まず一つは子どもを見る目を「プラス思考」にすること。悪いところばかりを探して「ダメじゃないの」と否定的な言葉を連発するのではなく、良いところを探して評価する。そういう発想の転換をするだけで、子どもに自信を持たせ、「やる気」を引き出すことができます。

第2のポイントは「タイミングよく、思いっきりほめること」。ほんのちょっとしたことでも、子どもが良い言動をとったら、間髪を入れずほめる。

それも針小棒大にほめあげることです。吉田松陰が「天下一」「防長随一」と弟子をほめ称えたように、70点を取ってきたら、お祝いのパーティーでもしかねないほどに喜んでみせる。子どもが「大げさすぎるよ」と照れるくらい、心からほめてあげるのです。

ほめられて嫌な気持ちのする人はいません。子どもは「次回はもっと良い点をとって、もっと喜ばせよう」と考えるようになります。「やら

される」という意識のある時と、自分で「やってみよう」と取り組む時とでは、子どもの集中力に大きな開きがあることを忘れてはなりません。子どもを伸ばすには、子どもの日頃の言動を注意深く見守る忍耐力と、「ほめる」というホンのちょっとした心がけがあれば十分。とても簡単ですし、費用もかかりません。

●勉強だけがすべてと思わない

勉強には「やらねばならないことは、自分の責任でキチンとこなす」習慣や「一定の時間、集中力を持続させる」能力を育てるという側面があります。もちろん、これが「何のために勉強するのか」に対する、絶対的な回答だとは言いませんが、勉強を通じて子供たちが学ぶべきことからのベストテンには、確実に入っているはずですよ。

では、こういう脳力を身につけるのに、勉強だけが唯一の方法でしょうか？

スポーツでも音楽でも何でも構いません。クラブ活動に熱中することなどによっても、責任感や集中力を1身につけることができるのではないのでしょうか？

義務教育が誰にでも課される通過儀礼だからと言って、勉強ばかりを絶対視しないで下さい。点数で順位をつければ、必ず一番からビリまで並びます。要領の良い子もいれば、そうでない子もいるのが世の習いです。理工系に進学しなかった方で、高校時代、微分積分が苦もなく理解できた人は少ないはずですよ。他方で、微分積分はラクラクだったが、小説の読解で「主人公の気持ちは」と言われると、さっぱりわからなかった、という方もいるでしょう。

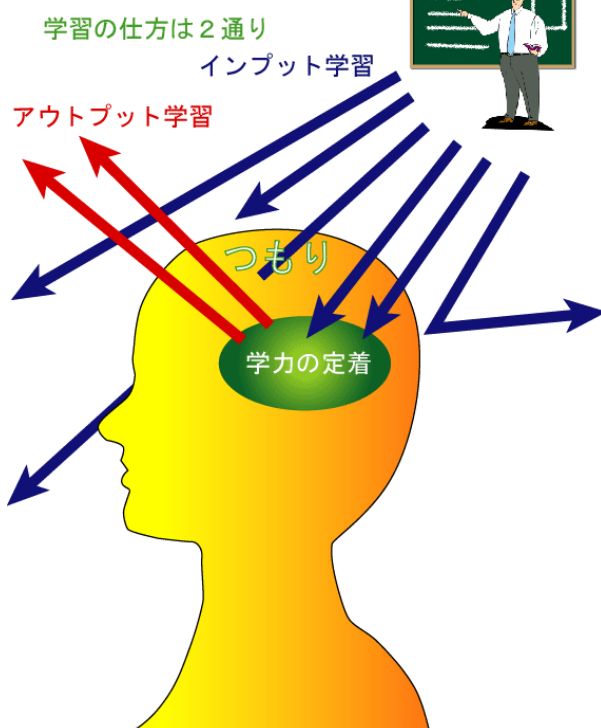
向き不向きは誰にでもあるのです。お子さんがやるべきことをキチンとこなす、何か一つの物事に集中して取り組めるのであれば、それで十分ではないのでしょうか。

勉強はそうした、人間として生きていくために必要な能力を磨くための、一つの手段でしかありません。勉強で良い点を取らせることを究極の目標にすべきではないのです。

第四章 学習塾のマル秘テクニック

●勉強しているのに成績が上がらないのはなぜ？

②アウトプット学習



本章では「コンピュータ学習」のノウハウを明らかにしながら、それをどのようにご家庭で応用するかについてご紹介します。

その前に、学習というものの本質について、知っておいて頂きたいことがあります。コンピュータの用語に「インプット」と「アウトプット」という言葉がありますが、勉強にも「インプット学習」と「アウトプット学習」というものがあるのです。

インプット学習とは、先生の授業を聞く、といったやり方に代表される学習方法のこと。読書のみの学習なども、インプット学習の一

例です。これで完全にインプットされていれば、万々歳ということになるのですが、「インプット」が受け身的に行われるため、どうも次の三つのパターンのうちのどれかに終わることが多いようです。

- ① 情報がインプットされずに素通りした状態。
- ② 情報が定着せずに、突き抜けた状態。
- ③ 情報を理解できずに、跳ね返した状態。

これに対してアウトプット学習は、インプットした情報を自分なりに出力しようとする訓練です。すなわち、自分なりに理解したことを、外

に出そうとする作業、それがアウトプット学習です。インプットした情報が定着していなければ、アウトプットできませんから、理解度の確認になります。またアウトプットすることで、インプットされた情報が定着するという効果も期待できます。「漢字を何度も書いて覚える」などがねもっとも分かりやすいアウトプット学習の例でしょう。

練習問題を解くのも、アウトプット学習の一つ。たとえば英文法の学習では、先生の説明を聞き、教科書の説明を読んだ程度で、学習項目が定着するはずがありません。だからこそ、演習問題を解いて（書いて）身につける、という作業が必要なのです。そして、学校ではこのアウトプット学習が、あまりにも少なすぎるのが現状です。

もちろん、学校で与えられる練習問題で十分な子どももいます。実際のところ、学校の練習問題（アウトプット）だけで、完全にインプットできる子どもは、学年によっても違いますが、全体のせいぜい2、3パーセントとイメージしておけば良いでしょう。たとえ塾に通っていても、集団指導型の塾では問題演習より、各単元の解説が中心になりますから、やはり足りません。塾で与えられる練習問題で十分という子どもは、約10パーセント程度でしょうか。

「塾にも行かせ、それなりに勉強している、させているはずなのに、なぜか成績があがらない」という問題は、実はアウトプット学習の不足に原因がある場合が多いのです。

●学力向上の秘訣はアウトプット学習にあった。



現在、塾に通っている子どもや家庭教師について学んでいる子どもの学力の向上度について考えてみましょう。

私自身30数年、個別指導塾で生徒を指導してきました。もちろん教える指導で学力が向上する生徒もいました。しかし学力の向上度がいまひとつかんばしくなく、現状維持がやっとという生徒もかなりの数いました。手を抜いて指導しているわけでもなく、当時は私も教えることを生業（なりわい）とし学力向上の研究をしながら指導していた、いわゆるアルバイト講師とはもちろんひと味違った指導をしていた自負があります。

こちらが一生懸命に指導したにもかかわらず、思うような学力の向上が果たせなかったのか。この答えは実は簡単なことだったので。

まず学力がぐんぐん向上していった生徒の様子をご紹介します。A君当時中3は4月に入塾してきました。英語を中心に指導したこの生徒は英語に対してまったく自信がないということでした。指導をしていくうちにこの生徒は中1ですでに学習しているべき三単現のSの内容をいい加減に理解していたことに気付いたので。平均点は常に取っていたのですが、この部分の理解が不足しているために、自信のない解答を繰り返していたようです。

自信がもてない科目は、なかなか勉強する気になれずに、中3になるまで放置していたようでした。この生徒には、もちろん中学1年生で習う三単現のSから指導を行いました。英語がわからなくなり始める分岐点があるとすれば、実はこの三

単現のSなのです。

この生徒はこの学力の穴が埋まると驚くような勢いで、自分なりに勉強を開始しました。もちろん宿題だけではなく、進んで問題集を解いていく姿勢がでてきました。さらに「先生、この問題がわからないので教えてください。」と積極的な質問も増えてきました。当然英語の学力が目を見張るほどの勢いでついてきたのは言うまでもなかったのです。

この生徒の例でわかるのは、受け身の授業をいやいや受けているだけでは、学力は定着しないということなのです。私はこの受け身だけの学習を「インプット学習」とよんでいます。

インプット学習のみでは、確かに習ったことに対して理解はできるけれども、すこし違う角度で問題が出題されると手がつかないことが多いようです。

テストの採点後、テストを返してもらって先生の解説を受けた時、全部理解していたのに、なぜテストの時に、こんなふうには書けなかったのかなということが、誰にでもあると思います。

ところが「インプット学習」した後に、「アウトプット学習」という訓練を行うことで、応用力が鍛えられるだけでなく、確実な記憶と思考が定着するものなのです。

今度は、学力がなかなか向上しない生徒の例をご紹介します。B君当時中2は、中1の2学期から通塾し始め、もう1年になります。性格はまじめなほうで、割合のんびりしているところがあり、授業中の態度は良好だったのですが、授業中時々好きなマンガのことでも考えているのか「ボーッ」としていることが多くあったようです。この生徒は授業中にテキストに大切なことや、答えはノートにきちんと書き込んでいるし、こちらの質問にも、そこそこ答えられるのですが、残念ながら、家ではまったく塾のテキストを開いたことがなかったのです。自宅学習もほとんどゼロの状態でした。

この生徒は「インプット学習」は一応やっているようにみえるのですが、「アウトプット学習」はゼロに等しいものだったので。試験前に教科書は読んで理解するはしても演習はしない。単語も書いて覚えな。問題の答えをみて理解はしても、自分ではスラスラ解けない。もちろん試験では平均点すら取れないことがしばしばでありました。

これらA君とB君の例でわかることは、いくらまじめに「インプット学習」を行っても自分なりに考え抜いてそれを工夫する「アウトプット学習」による訓練を怠れば、学力は伸びません。

それは、せっかく新鮮な食材を仕入れておきながら、料理もせずに腐らせてしまうことと本質的には同じことなのです。

集合授業や普通の個別指導塾、さらに学生の家庭教師の指導にありがちな指導方法はまさに、この「インプット学習」が中心なのです。

勉強はインプット学習からアウトプット学習につなげて初めて学力の向上がることを理解して下さい。

●コンピュータ学習とはアウトプット学習だった。



それではどうすれば、誰にでも簡単に「インプット学習」から「アウトプット学習」に連結させることができるのでしょうか。

コンピュータ学習における学習効果の中で、私が注目した最大のメリットが実は

ここにあったのです。

コンピュータ学習では、まず、自分のペースで学習内容をインプット学習します。まずノート学習から進め、解き方を自分のペースで理解します。次にコンピュータに向かって自分で考え暗記したことをアウトプットします。アウトプットして初めてコンピュータが正解か不正解かを瞬時に自動採点します。つまりコンピュータに向かってアクションしなければならないわけで、頭にインプットしたものをすぐにアウトプットする。つまりインプットとアウトプットのキャッチボール。このタイミングが、学習効果を最大限に引き上げてくれる秘訣なのです。勉強の仕方を会得していない子どもにとって、勉強の仕方から訓練させることになるのです。今まで膨大な時間を費やして学校や塾で授業を受けたにもかかわらず学力が定着していない子どもの場合と比べて、コンピュータで学習している子どもは学習時間に比例して学力が向上していくのも当然なのです。

第五章 子どもを伸ばすコーチング術

●コーチングの前に知っておきたいこと

コーチングそのものについて、もう少し補足しておきましょう。まず「子どもは勉強をするという行為が、基本的に嫌いなものである」という心構えを持つことをお勧めします。ほとんどの子どもは、ゲームなどの遊びは進んでやりますが、勉強やお母さんのお手伝いは、なるべく避けたいと考えています。こういう心理は、大人でも同じこと。

映画を見たり、ドライブをしたり、あるいは趣味の陶芸を楽しんだり、ということには、積極的になれても、大掃除をしなければならないとか、仕事関係にお詫びに行かなければならないといった義務的行為になると、途端に腰が重くなるのが普通です。

自分だってそうなのに、親という立場になると、子どもの行動を何とかコントロールしようとして、次のような手段をとってはいませんか？

「批判する」

「責める」

「文句を言う」

「ガミガミ言う」

「脅す」

「罰する」

ほとんどの親御さんは、このような外的コントロールで子どもの心や行動を変えられる、いや変えなければならない、と信じ込んでいます。

その結果、親子のコミュニケーションが行き詰まり、お互い不愉快極まりない思いをしてストレスを抱え込む。最近増えている引きこもりも、こうした親の態度に根がある場合が少なくありません。

繰り返しになりますが、一般的に強制できたとしても、人間が外的コントロールで変化することは、ほとんど無いのです。お子さんがコーチングを開始してしばらくの間、毎日「人間は自らの考えで行動する時、最大限の力を発揮することができる」と、ご自身に言い聞かせるようにして下さい。

●この三つであなたも名コーチ

コーチングのテクニックに習熟するためには、自分と問答せよということ、前に述べました。お子さんのコーチングが正に目前に迫った本章では、コーチング術を(手っ取り早く)身につけるための三大原則をお教えしましょう。それは、

- ・ 答えは本人(子ども)が持っている
- ・ 本人は、問題を解決する能力を持っている
- ・ 本人から答えを引き出す過程がコーチングである

という三点です。

たったこれだけのことを肝に銘じておくだけで、今日からあなたも立派なコーチです。

コーチングは「人に自らの考えで行動させる」手法ですから、「質問型のコミュニケーションを用いて、相手に自分がとるべき行動を選択させる」のでした。「でも、どう質問すれば？」と不安を感じる必要はありません。

コーチングのマジックワードは次の三つです。

- ・ なるほど(受け入れ)
- ・ どうすればいいと思う？(問いかけ)
- ・ ○○なら大丈夫だよ(励まし)

基本は「どうすればいいと思う？」を連発すること。そして「なるほど」と受け入れ、「大丈夫だよ」と励ます。コーチングのテクニックはたったこれだけで良いのです。あとは最後にもう一ひねり、「いつごろまでに、何をどこまでできるかな？」と、お子さんに目標達成までの期日を考えさせ、決定させるだけ。どのように会話を進めるか、モデルケースを見てみましょう。

「太郎／花子はどうしたら良いと思うんだい？」(問いかけ)

「なるほど」(受け入れ)

「それは良いアイデアだね」(励まし)
「でもそうすると、これこれの問題が出るかもしれないよね？」(別の観点を与える)
「それについては、どう考えたら良いかな？」(問いかけ)
「なるほど、その通りだね」(受け入れ)
「いい案だ、それじゃ、太郎／花子の考えた通りで行こう」(励まし)
「じゃあ、いつまでにできるかな」(問いかけ)
「わかった。期待しているよ」(受け入れ&励まし)

少し応用を加えてありますが、基本は「質問」、そして相手の返事を「なるほど」と受け入れ、励ます。もし問題点があれば、それを指摘し、さらに「質問」。この繰り返しです。

中でも「受け入れる」「励ます」の部分が、非常に重要です。「ダメ…」「でも…」「しかし…」「違う…」「絶対～ない」などの否定的な言葉は、口にしないようにしましょう。

「ダメじゃないの！」を「太郎／花子はどうすれば良いと思っているの？」に、「ちっともやらないんだから！○○をなさって言ったでしょう！」を「いつごろまでに、何をどこまでできると思う？」に変えるのです。

最初のうちは努力が必要です。

多大な努力が必要なことから、日頃、子どもに対して、どれほど否定的な言葉を繰り返していたか、気づくことになるでしょう。ついつい禁句が口からこぼれ落ちそうになったら、最初はウソでも良いですから、「なるほどね」を連発することです。

外部から強制された行動はハッピーではありません。しかし、自ら選択した行動は、人間をハッピーにします。「ヘンなこと約束しちゃったな」と思っても、命じられた時のようには、苦にならないもの。同じ行動をとっていても、それに至るまでのプロセスの違いで、精神状態や意欲に雲泥の差がでます。その小さな積み重ねが、時には企業を再生させるほどのパワーを生むのですから。

●コーチング開始の第一歩

学力を下げるのは、上げるのと違って簡単です。何もしなければ、時間と共に学習内容を忘れ、放って置いても学力は下がっていきます。あまりにも当然のことですが、学力をつけるには、それなりの努力が必要だ、ということに改めて実感してください。では、子どもにとって、その努力の原動力となるものは何なのか？コーチングを始めるにあたって、親子でまず、そこから考える必要があるのではないのでしょうか。

「努力の原動力になるもの…。考えてみたこともなかったし、答えなんて想像もつかない」

コーチングを開始される親御さんのほとんどが、そうおっしゃいます。ですが、忘れてはいませんか、コーチングの三大原則を？答えは子ども自身が持っているのではありませんでしたか？親はそれを、質問によって引き出してあげれば良いのです。

そのための第一歩は、お子さんに「勉強する目的ってなんだろうね？」と問いかけること。子どもに自ら考えさせることが大切なので、親の考えを押し付けてはいけません。ひたすら「どうしてそう思うの？」「それはどうしてかな？」などと、質問していくのです。

この時点では、「これ」という回答が出なくても、あまり深追いするひつようはありません。

「勉強にはどんな意味があるんだろう」と考え、対話する時間を親子で共有する。そのことに意義があるのです。勉強のコーチングに踏み出す前に、このステップを踏んでおくかおかないかで、後々大きな差が出てきます。ぜひ「どうして勉強するんだろう？」という問いから、コーチングを開始してみてください。

私たちの「ショウイン」をご利用の場合は、「勉強のスケジュールを話し合っ決めて、実行することを、コーチングの手法を使って子どもに約束」させたら、あとは「できたらほめる」、「子どもを信じて励ます」という姿勢で、お子さんを見守って頂くだけで結構です。

第六章 「アウトプット学習」が効果的に学べるショウイン式学習システム

●自宅でも学べるショウイン式学習法



在宅学習のニーズが年々高まってきています。夜の通塾時の安全面から保護者の送り迎えは常識となっています。在宅学習としては、現在家庭教師か通信教育しかありませんでした。

後者の通信教育では子どもにとって学ぶ目的がはっきりしていないと続かないし、質問の受け答えにあまりにもタイムラグが生じるというデメリットがありました。家庭教師の場合は、学生教師が自宅に出入りするという煩わしさと、親不在では密室になるため不安な要素が拭いきれない、月謝も高いという問題点がありました。

ショウイン式学習の場合、ネットとパソコンがあれば24時間、どこにいても(旅先からでも)学習できるのです。さらにコーチングを行う担任コーチが全員に必ずついて指導します。

毎週定期的に担任コーチが、子どもの学習履歴をチェックし、直接スカイプか電話を使って、子どもへ声かけをします。緊張感の維持と学習の習慣作りを行うことが出来、全く新しい家庭教育のスタイルが生まれることとなります。月謝も従来のものと比べると破格の金額となっています。

さらに「ショウイン・プラス」(別料金)をつけると毎週決まった時間にテレビ電話でマンツーマン指導を行うサービスも用意しています。

※担任の先生は全員、日本青少年育成協会「教育コーチング養成講座」、ショウインStudy Operating Method、の2つのプログラムを修了した方のみをお願いしています。

●塾でも学べるショウイン式学習法

全国にショウイン式学習をサポートしてくれる通塾型の学習塾(ショウイン認定校)が開業準備も含めて40教室あります。また続々と誕生していますので、塾に通ってショウイン式の学習を受けることができます。

ショウイン認定校では、塾に通いながら塾長から直接コーチング指導を受けられるほか、模擬試験会場、英検検定会場、漢字検定会場になっていたりもします。また地元のことを熟知した先生から進路指導などもこまめにやってもらえます。

塾の学習の続きが自宅のパソコンでも出来ますし、塾と家庭学習が連携した画期的な新しい学習スタイルです。

塾長は全員、日本青少年育成協会「教育コーチング養成講座」、ショウインStudy Operating Method、の2つのプログラムを修了した方が指導に当たりますので安心してお任せ下さい。

教室によっては、ロボットクリエイターの高橋智隆先生(東京大学先端科学技術研究センター特任准教授)主催のロボット教室なども開催しています。

最寄りのショウイン認定校は下記ホームページよりご覧ください。

<http://school.showin.co.jp>

